



全農教

日本帰化植物友の会通信



NO.3 [2003年7月23日 発行]

神戸港新産の帰化植物 (3)

※水田光雄

Mitsuo MIZUTA: Newly naturalized plants at Kobe port (3)

はじめに

2001, 2002年に新たに記録された帰化植物及び同定完了した種類について報告する。報告にあたり、ご指導いただいた大阪府立農芸高校、植村修二氏並びに神奈川県生命の星地球博物館、勝山輝男学芸員にお礼申し上げます。

追加した種類数

水田(1999)に新たに追加した種類は24種類で、全体で413種類(亜種, 変種, 品種を含む)となった。追加種は目録のとおりである。これらの中から特記される種類を選び、紹介する。なお、採集標本は全て領栄短大の標本庫へ収めた。

特記される種類

1. ムシトリマンテマ *Silene antirrhina* L.

2002. 5. 11 中央区港島南

北米原産の植物である。夕刻から朝にかけ開花する。中には花冠を持たないタイプもあるらしい。上部の茎間には褐色の粘液を出すところがあるので、「虫し捕り」という和名がついたものと考えられる。我が国では、1950年長野県で採集され、その後、千葉、神奈川、三重、岡山、徳島、香川などで採られている。本県では筆者が1996年宝塚市すみれが丘で採集している。上記当該生育地では、30cm程度に成長した株が1株見られた。埋立造成地の表土飛砂(流亡)目的に使用される輸入牧草種子に起因するものと考えられる。

2. ハリナスビ *Solanum sisymbriifolium* Lam.

2002. 5. 11 中央区港島南

南米原産の植物である。全草に鋭い刺と腺毛を有し、葉は羽状に裂ける。花は、淡紫から白色の花が混在する。帰化植物図鑑(長田 1976, 1986)では1年草と記載されているが、生育地である道路中央分離帯では大株となっており、状況からして数年は経過しているように見えた。多年生であることから、当初、神奈川県から報告されているキダチハリナスビ(*S. linnaeanum*)と考えられた。発見後、何度か生育状況を観察したが、果実を見ることができなかった。その後、港湾清掃のため除草された。



▲ ハリナスビ

3. イヌヤマモモソウ *Gaura parviflora* Dougl.

2002. 8. 4 中央区港島南

北米原産の植物である。全体に腺毛を持ち少々粘る。穂状花序となり、花は小型で白色から淡紅色となる。我が国では、明治時代に渡来し、一時小石川植物園で栽培されている。

1915年に鹿児島で採取され、その後、東京、広島、静岡、岡山などで採られている。また、沖縄の米軍基地周辺にも生育する。生育地では道路中央分離帯や道路等で多数生育していることから、進入後数年は経過しているものと考えられる。

4. ユメノシマガヤツリ *Cyperus cogestus* Vahl

2002. 6. 4 中央区港島南

南アフリカからオーストラリア原産の植物である。ポートアイランド2期工事の埋立地の道路脇側溝で、大型のカヤツリグサの1種が多数生育しているのを見つけた。同定の結果、当該植物は東京湾岸に帰化している、上記の植物と考えられた。確認を得るため、神奈川県立生命の星・地球博物館の勝山輝男学芸員に標本送付し、本種に相違ない旨の回答をいただいた。

我が国では最初1982年東京の「夢の島」で確認された新参の帰化植物で、発見地にちなみ命名されている種類である。現在、東京湾岸の東京、千葉、神奈川で採集されている。

また、2001年三重県四日市の南部丘陵公園で星野悦子氏により採集されているもので、近畿以西では今回が初めてと考えられる。なお、当該生育地の道路側溝では

雨水が溜まるなど湿地状態となり、生育環境が整い、生育できたものと考えられる。



▲ ユメノシマガヤツリ

5. ムカゴイチゴツナギ

Poa bulbosa L. var. *vivipara* Koel.

2001. 4. 14 中央区港島南 2002. 5. 5 東灘区向洋町中

欧州原産の植物である。1988年岡山で記録されたものについて、上記和名が新称された種類で、神奈川から記録された母種のチャボノカタビカの穂が、胎生型に変化している種類である。本種は北米に帰化しているものは、胎生型のものが多いという。以前、高松市の三谷進氏に聞いた話によると、岡山の記録より早い時期に香川県坂出市で採集し、当時同定依頼したが奇形個体として扱われたこと、その後上記学名の植物と同定し、穂の形から布袋様の腹の形を連想し「ホテイイチゴツナギ」を提唱していた。新称されたムカゴと言う名前には、イネ科の別の種類にあり紛らわしいと反対したが、上記の和名が採用されたとのことである。

我が国では、上記の岡山、香川以外では福岡、三重等から記録されている。本県では、1990年芦屋市で藤本義昭氏により採集され、その後県下数カ所から採集されている。上記の2カ所の生育地は、新しく作られた緑地内で、表土保護の目的で使用された輸入牧草種子の夾雑種子に由来するものと考えられた。

帰化植物目録（追加種）

（凡例）調査地の所在地：目録の地区名の所在地を記す。

調査地区名	所在地
P. I (ポートアイランド)	神戸市中央区港島、港島中及び港島南
小野浜	神戸市中央区新港町及び小野浜町
摩耶	神戸市灘区味泥町、灘浜町及び摩耶埠頭
六甲 (六甲アイランド)	神戸市東灘区向洋町西、光洋町中及び光洋町東
深江	神戸市東灘区深江南町4丁目及び深江浜町
兵庫	神戸市兵庫区築地町 (兵庫埠頭)

キク科 (Compositae)

Aster pilosus Willd. キダチコンギク

P. I (2002)

北米原産

Actium Lappa L. ノラゴボウ

小野浜 (2002)

欧州原産

Erigeron pseudo - annuus Mak. ヤナギバヒメジョオン

六甲 (2001), P. I (2002)

北米原産?

Silybum marianum Gaertn. オオアザミ

兵庫 (2002)

欧州原産

Tanacetum vulgare L. ヨモギギク

P. I (2002)

欧州原産

ゴマノハグサ科 (Scrophulariaceae)

Antirrhinum orontium L. アレチキンギョソウ

P. I (2002)

欧州原産

Linaria canadensis (L.) Dum. Cours. var. *texana* (Scheele) Pennell オオマツバウンラン

P. I (2001), 六甲 (2001)

北米原産

ナス科 (Solanaceae)

Solanum sisymbriifolium Lam. ハリナスビ

P. I (2002)

南米原産

Solanum nigrescens Mart. Gal. オオイヌホオズキ

小野浜 (2002), P. I (2002), 六甲 (2002)

南米原産

クマツヅラ科 (Verbenaceae)

Verbena incompta Michael ダキバアレチハナガサ

兵庫 (2001), P. I (2002)

南米原産

- Verbena litoralis* Hunb., Bonpl. & Kintb. ハマクマツヅラ
P. I (2002) 南米原産
- アカバナ科 (Onagraceae)
Gaura parviflora Dougl. イヌヤマモモソウ
P. I (2002) 北米原産
- マメ科 (Leguminosae)
Medicago lupulina L. var. *cupaniana* (Guss.) Boissier オニコメツブウマゴヤシ
兵庫 (2001), P. I (2002) 欧州原産
Trifolium repens L. form. *roseum* Petermann モモイロツメクサ
P. I (2000) 欧州原産
Lespedeza juncea (L. f.) Pers. カラメドハギ
P. I (2002) アジア大陸原産
- ナデシコ科 (Caryophyllaceae)
Cerastium fontanum Baumg. ssp. *trivile* (Link) Jalas オオミミナグサ
兵庫 (1998), 摩耶 (1994), 六甲 (1994) 欧州原産
Silene antirrhina L. ムシトリマンテマ
P. I (2002) 北米原産
Silene pendula L. サクラマンテマ
兵庫 (2001) 地中海沿岸原産
Silene vulgaris Garcke シラタマソウ
兵庫 (1999) 欧州原産
- タデ科 (Polygonaceae)
Polygonum dumetorum L. ツルタデ
P. I (2002) 欧州～西アジア原産
- カヤツリグサ科 (Cyperaceae)
Cyperus cogestus Vahl ユメノシマガヤツリ
P. I (2002) 南アフリカ, オーストラリア原産
- イネ科 (Gramineae)
Aira caryophyllea L. ヌカススキ
六甲 (2002) 欧州原産
Chloris gayana Kunth アフリカヒゲシバ
P. I (2002), 六甲 (2002) 南アフリカ原産
Poa bulbosa L. var. *vivipara* Koel. ムカゴイチゴツナギ
P. I (2001) 欧州原産

文 献

- 浅井康宏 1988. 日本帰化植物誌資料 (2) 植物研究雑誌 63 (5): 197.
榎本 敬 2001. 倉敷自然史博物館友の会ニュース (113).
藤本義昭 1995. 兵庫県イネ科植物誌. 35, 88, 199.
星野悦子・加田勝敏 2002. 四日市市南部の植物相 (予報). 20.
神奈川県植物誌調査会編 2001. 神奈川県植物誌. 409, 1188, 1236, 1238.
狩山俊吾・小島裕子 2001. 岡山県新産の帰化植物 (12). 倉敷市立自然史博物館研究報告 (16): 108.
近田文弘 1999. 帰化植物マツバウンランの覚え書き 植物地理・分類研究. 47 (1): 63-65.
水田光雄 2000. 神戸港新産の帰化植物 (1). 兵庫の植物 (10): 89-92.
水田光雄 2001. 神戸港新産の帰化植物 (2). 兵庫の植物 (11): 101-103.
水田光雄 2001. 部分帰化植物のオオミミナグサについて 兵庫の植物 (11): 104-106.
長田武正 1975. 日本帰化植物図鑑 (北隆館). 26, 114, 158.
長田武正 1986. 原色日本帰化植物図鑑 (保育社). 18, 39, 117, 124, 301, 305, 351.
長田武正 1989. 日本イネ科植物図鑑 (平凡社). 204, 260, 524.
自然環境調査研究者制度活動事例集 (財) 三重県環境保全事業団.
清水矩宏・森田弘彦・廣田伸七 2001. 日本帰化植物写真図鑑 (全国農村教育協会).
44, 46, 206, 288-289, 419, 435, 463, 483.

※ 〒664-0881 伊丹市昆陽西中田 9-17
兵庫の植物 13号 (2003) より転載

みなかたくまぐす
十九世紀末に南方熊楠が発見していた帰化植物

※吉田芳輝

拜啓 時下益々御発展の御様子、先日「友の会通信」No. 2を拜受し投稿の決心が付き申候。同封投稿文は以前から薄々不思議に思い居りし事を一昨年確認、何度も書き直したものに百年も前の事なれども、貴『日本帰化植物写真図鑑』を入手して、発見者の名、記し居らず故、貴社宛電話にて問合せたり、他著を調ぶるに手間取り、結局不明のまま差上るものに候。御採用に相成候はば幸甚に候。 平成 15 年 4 月 5 日

昭和 16 年 12 月 29 日の南方熊楠没後最初に南方を顕彰したのは中山太郎である。中山は大正 15 (1926) 年 5 月、南方の二冊目の著書『南方随筆』の編纂を委ねられたが、その後記「私の知っている南方熊楠氏」の中に、柳田国男等から苦情が出た程「出たら目」を書いて物議を醸した人物である。最初の南方顕彰本『学界偉人南方熊楠』が刊行されたのは昭和 18 (1943) 年 1 月 15 日であるが、最初の顕彰本としての功は認めるが、誤謬の多い事も事実である。その 52 頁に

やがて翁は和歌ノ浦の円珠院の住職愛宕貫忠和尚と相識り、約半年ほど寄宿したが、此の間に翁は寺門の桜樹から新種の粘菌と、手水鉢から光り藻とを発見し、土地の人から『無欲の先生』と評判されたものである。(注・傍点は筆者による)

これを受けて昭和 19 (1944) 年 7 月 20 日に、二番目の顕彰本というべき平野威馬雄の『博物学者・南方熊楠の生涯』が発表された。その 141 頁に

それから間もなく、和歌の浦の円珠院の住職愛宕貫忠和尚と相識り、約半年ほどその寺に寄宿していたが、この間に翁は寺門の桜の樹から新種の粘菌と、手水鉢から淡水藻の一種珪土をふくんだ角陵のために光を反射する『光り藻』とを発見して、学界に報告した。

としている。平野は昭和 47 (1972) 年 7 月 10 日に刊行した『くまぐす外伝』にも同じ文を流用している。

昭和 42 (1967) 年 9 月 25 日に上梓された吉川弘文館の人物叢書・笠井清著『南方熊楠』は実に素晴らしい著書であった。この書によって南方熊楠の知られざる事実が明らかになり、多くの南方ファンが啓蒙された事であろう。その 161 頁に円珠院在住中の発見として、

熊楠はこの寺の十三塔を見て、英国で仏教芸術なども研究していたので直ぐに、その稀代の逸品であることを認めているが、それが後年重要美術品となるのである。また、寺の桜の木から新種の粘菌を発見したり、手水鉢から淡水藻の一種「光り藻」を発見したりしている。

こののち、多くの南方熊楠の伝記のようなものが発表された。面白ければ嘘でも良いと云う小説もあったが、中には真面目な研究者による著書もないではないし、「光り藻」の事を書いていない著者もいるが、失礼乍ら円珠院と云えば「光り藻」と反応したものばかりである。但し、中山が斯様な話を捏造した訳では決して無い。南方

没後すぐ昭和 17 (1942) 年 1 月 10 日夜、田辺町吉田屋に於て「紀伊新報社」主催の「南方翁を偲ぶ座談会」が催され、出席者の和歌山県史蹟保存課課長田中敬忠と田辺高等女学校教諭北島脩一郎が無用意に述べた言葉が元になっている。

田中敬忠

和歌浦の愛宕山の円珠院にも居られましたね。

南方常楠(熊楠の次弟)

ああ、あの寺にも居ました。あそこの老和尚が非常に面白い人で話が合ひ半年ばかりも厄介になった。

どこに居ても尻が長くて。

田中敬忠

貫忠という和尚ですね。同和尚も趣味が広くて菌類など蒐集された。或時先生は寺門の桜の古木から世界的に珍らしい菌類を発見されたことがあり、当時附近の人から「欲のない大先生」が居るなどと噂されたのでした。それから何とかいふ藻……。

北島脩一郎

光り藻でせう。

田中敬忠

さうさう、それがあの寺の手水鉢で発見された。

小畔四郎(粘菌学の弟子)

夜でも光る藻ですか。

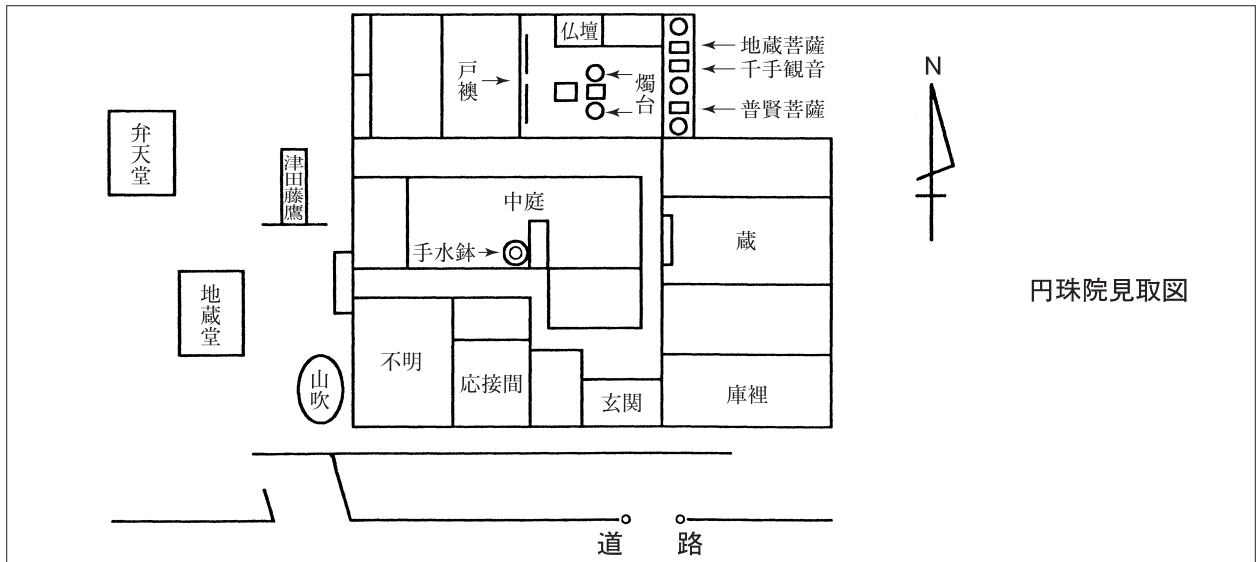
北島

さうです。私もあの藻のお話は聞きました。あそこでは新発見だったのです。

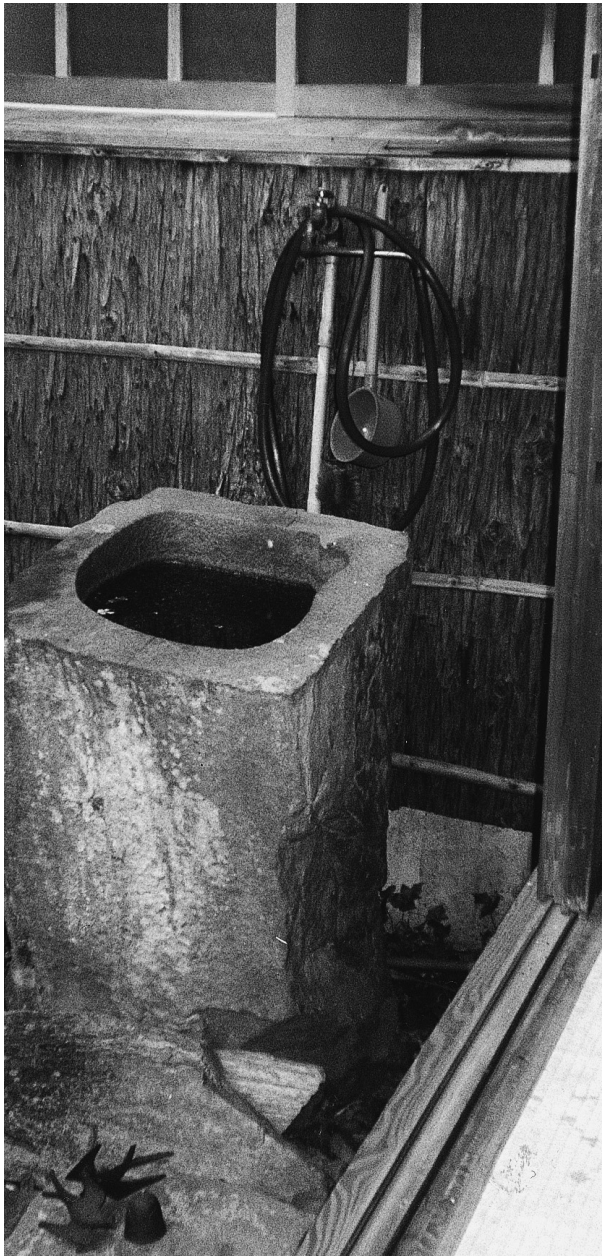
明治 33 (1900) 年 9 月 1 日、英国での生活を断念した南方熊楠が日本郵船株式会社の阿波丸に乗船、悄然神戸港に降り立ったのは 10 月 15 日であった。11 月 4 日、次弟常楠の妻マスの長兄中野文左衛門の世話で、和歌浦近き愛宕山円珠院に入る。

愛宕山は円珠院瑞光寺と云う。和歌街道の松原の東にある。宗旨は天台、愛宕権現が山上に安置してある。防火の霊験ありとて、参詣の人多く、毎年陰暦 6 月 24 日は千日祭りとして殊に繁昌。山上の風景、西は蒼海漫々として阿土の二国眉の如く、眼下には吹上の浦小江の浦、沖に釣りする海士小船、汀に貝拾う賤の子まで一々見え渡り、藤白の御坂、名草山、三葛の藻塩焼く煙まで手に取る如く望まれます。今は山下に移して寺門の内の左方にあります。

上の文は明治 32 (1899) 年刊行の『南海鉄道案内』



円珠院見取図



▲ 円珠院の手水鉢

からの抜粋であるが、下に移されて南方熊楠が仮寓された建物は、明治の末か大正の始めに取り壊し、その時の廃材等で、中庭のある現在のような建物に改築されたそうである。弁天堂前の手水鉢は、その時、中庭の南東部に移されて現在に至る。翌明治34（1901）年2月8日迄の98日、毎日泊まった訳ではないが、南方熊楠は此の間円珠院で厄介になった事になる。

南方日記で見る限り、桜樹から新種の粘菌発見も、「光り藻」発見の記録もない。精しく云えば、1月23日に和中金助氏が買い取った寺のしだれ桜が持ち去られるが、此の間粘菌発見記録は三度であり、その内一度は寺後の山、二度は寺以外である。二日後の25日に記された所集粘菌類は十種にのぼる。先の三種を引いて七種の内の一種が桜樹からの発見である、と大まけにまけても、桜樹から新種発見とか、英国の粘菌学者アーサー・リスターに送って新種を附せられたとはどこにもない。そもそもそれ迄は、粘菌は死んだ物にのみ付くと考えられていたが、明治35（1902）年頃生きた物にも付くと気づいた南方がリスターに申出、色々研究して大正6（1917）年8月24日、自宅の柿の木から新種の粘菌を発見、アーサーの娘の粘菌学者グリエルマ・リスターに送り、大正10（1921）年1月3日、

小生の名に因み粘菌の種属 *Minakatella* ^{ミナカテルラ} 設立の状受く。

とあるように、ミナカテルラ・ロンギフェラと云う粘菌が世界で始めて生きた物に付いた新種発見の嚆矢であって、16、7年前に生きた桜樹からの発見は考えられない。「光り藻」の名は見えないが、あと5日で20世紀という日にあたる明治33年（1900）年12月27日の日記に、

午後羊歯一種及 *Wolffia* を寺内を取る。*Wolffia* は弁天堂の手水鉢中にあり。

弁天堂前の手水鉢で「光り藻」発見。こうあるからには、良くは分からないが *Wolffia* が「光り藻」なのだろうか。（推測ではあるが）翌34（1901）年2月6日、飲酒肉食反吐に困じはてた僧により寺外退去を中野文左衛門

の手代留助を通じ話され、2月9日寺を出るが、4月19日（自分が行けぬから）常楠の手代松次郎に頼み、

愛宕山にて *Wolffia* 十顆斗りとり来り、プレパラート作るに夕迄かかる。

とある。その後、南方熊楠は「光り藻」発見を発表したのか、又はそれらしき事は書いてないのか。明治43(1910)年3月24日の日記に、

午後より夜おそく迄大阪毎日への状認む。

とのみ記された「大阪毎日新聞社」宛に書かれた初期の神社合祀反対運動の未公開自筆原稿と云うものがあって、4月5日の日記に、

大毎へ状可出事。

で終わってしまって、大毎にも発表されていなかったものを、平成5(1993)年、八坂書房刊『覚書・南方熊楠』の中に「神社合祀反対論初期資料について」として発表された資料の一つであるが、

先年、^{スウェーデン}瑞典の藻学者ウィットロック、^{ロンドン}竜動粉塵の真中、トラファルガル辻の噴水盆中より特種の鼓藻を見出し、同学を驚倒せしめたり。予婦朝後、諸社寺の手水鉢を検して珍奇の生物を獲し事多し。例せばショダ氏が設立せるテトラストルム属は二種のみ有しを、予氏に後る事7年にして一新種を妙法山（注・熊野那智）の手水鉢底の水垢より見出せり。ウィルフィアは顕花植物の最小き者にて、大さ芥子粒を越ず。台湾に一種有りと聞くが、予はこれを和歌浦の円珠院内の手水鉢より見出せり。

Wolffia をウィルフィアとはおかしいのだが、翌明治44年(1911)年5月25日付柳田国男宛書簡に、

上等植物においても従来四国、九州、また琉球、また熱帯地方にのみ産すと思われるもので、紀州にあることを見出したるものも多く候。たとえば *Wolffia* と申し、これほどの植物で、世界の上等顕花植物中最小のものと称するものなど、台湾にはあれど本州にあるを知らざりしに、小生紀州和歌浦の東禅寺（注・南方の記憶違いで瑞光寺が正しい）と申す寺の古き手水鉢の中より見出し候。

（平凡社『南方全集』8 p.33）

同年8月29日付松村任三宛書簡にも、

顕花植物中最微の物たる *Wolffia* の一種を、和歌浦近き東禅寺（前注同様）の弁天祠前の沙岩手水鉢より見出だせり。

（『南方全集』7 p.501）

翌明治45(1912)年2月9日付白井光太郎宛書簡にも、ウィルフィアというは顕花植物の最微なるものなるが、台湾で洋人が採りしと聞くのみ。和歌浦辺の弁天の小祠の手水鉢より少々予見出したる以後見ることなし。

（『南方全集』7 p.561）

昭和5(1930)年4月13～15日、「紀伊毎日新聞」連載毛利清雅社主宛書簡に、

宇井氏の「高等植物目録」を見て知る通り、本県にのみありて他になきものとはなはだ少なし。さて、

そのはなはだ少なき本県のみでありて他府県になきものというも、実は人の目に付きにくきほどのつまらぬもの多く、追い追い他府県にて見出だすはずと認むるもの多し。

例せば、小生那智の四の滝下にて採りしヤッコソウの一種、和歌浦愛宕山で採りしウォルフィアごときは、ただ一度極めて少数を取りしものにて、そのあと見当らず。前者は標本どこかへ隠れて見当らず。後者は幸いに今も保存しあるも、顕微鏡で見ねば見えぬものなり。こんなものは栽培のしようもなく、ただ見当たり次第標品にして置けばよいので、もし栽培せんと欲せば手水鉢一つあったら数千も養うことができる。

（『南方全集』6 p.176）

「光り藻」とは、門外漢の筆者でも「隠花植物」と即答できる。ヨーロッパでは早くから知られていたらしいが、我国では大正元(1912)年千葉県君津郡竹岡村荻生の弁天窟中の黄金池に発見せられ、その後各地に広く分布せられている事が解った。とある。学名 *Chromulina Rosanoffi* Butschli クロムリナ科に属する鞭毛植物。

（『平凡社百科事典』）

アンモニアを含むあまり清澄でない溜水中に発生し、水面に金色を呈するので古来光水の名があるそう。

南方先生は数千点に及ぶ菌草類の水彩画を残して居られるが、南方さんの採集品の中に（夜光ると云う）ツキヨタケがないのです。

（『南方熊楠菌類彩色図譜』別冊 p.148）

とは小林義雄博士の言だが、南方さんは光り物にはあまり興味がなかったのであろう。なにしろ「無欲の先生」と呼ばれていたんだから。余談はさておき、*Wolffia* とは何なのか。

神坂次郎氏は『縛られた巨人』p.164に、「光り藻」とならんで「ウォルフィア・ミクロスコピカ」なる名前を掲げて居られるが、年月日不詳の宇井縫蔵宛南方書簡（注・大正4年8月7日及び10月10日の『牟婁新報』に「宇井氏の『紀州植物』に追加」の南方文が載るから、大正4年の書簡と推測される）に此名があり、

ウヲルフィア・ミクロスコピカ

和歌浦愛宕山東禅寺（前注同様）内弁天祠前の手水鉢。これは標本和歌山より丸善（欠町酒屋）に依托し持来りあり、顕花植物中最も微小なるもの、芥子粒ほどなり。台北にある外、本邦版図内に従来無しもの（大学目録による。牧野（注・富太郎）氏来信又同じことをいへり）新庄村猿茶屋辺の田よりも少々とりしが、其標品は多くの藻と混じ、只今一寸分らず、故に無証拠なり。是れは本邦に於ける最も奇なる植物の一なれば、必ず載せ被下度候。

（『増補南方熊楠書簡集』p.21）

奇なる植物とは分かって何か不明である。やはり専門家に聞くのが一番と、南方邸保存の植物標本解明に実績のある土永知子先生（和歌山県立田辺高校教諭）にお

尋ねると、「顕花植物の最小のもの」を手がかりに、たちまち解答を寄せられた。
Wolffia arrhiza (L.) wimmer ミジンコウキクサ属。ヨーロッパ南部原産の帰化植物。根が無く芽を出して繁殖。長径 0.7~0.5 mm, 短径 0.4~0.5 mm, 厚さ 0.3~0.5 mm で顕花植物中最小。中央のくぼみにめしべ一本、おしべ一本がある。日本では中路正義が昭和 13 (1938) 年、東京墨田区向島にて最初に発見。牧野富太郎により命名。世界で 4 属 25 種、内我国には 3 属 5 種、ウキクサ・アオウキクサ・ヒンジモ等約 6 種がある。現在は人工栽培もされているとか。

先に南方書簡を貰った松村・白井（注・著書に『植物渡来考』あり）は日本の理学界を先導する大植物学者である。南方のウォルフィア発見に何故注目しなかったのか。無視したのか、知識不足だったのか。白井宛南方書簡の多くが未発表故なんとも云えぬが、標品の請求はなかったと推測される。

南方の言葉に斯様なものがある。

小生もずいぶんうそはいうが、いかな不可思議な弁才をもってするも、全無のことは、いわれぬものなり。

（『南方全集』7 p.301）

ウォルフィアの事を斯様に書き上げた南方の言が、どう

してもうそとは思えない。

粘菌学の高弟とも云われた小畔四郎宛書簡等見ると、蕨・苔・淡水藻・菌・粘菌等の研鑽を求めている。これらは全て陰花植物である。南方自身は、

小生のもっとも力を致したのは菌類で、

（『南方全集』7 p.28）

とも書き残しているが、彼の残した標品には羊歯や三千種に及ぶ熊野産高等植物、友人に採集依頼した立山の高山植物、（長子熊弥に破碎されたが）大量の昆虫見本が、又貝類の標品も数多く発見されている。このウォルフィアにしても、外国の専門誌から知識を得ていたからその発見ではなかるうか。

「中路正義よりも 38 年前の 1900 年（19 世紀末）に、日本で最初に *Wolffia* ミジンコウキクサを南方熊楠が発見していた」

ことは事実として受けとめたい。

全国農村教育協会刊行『日本帰化植物写真図鑑』p.473 に、

ミジンコウキクサは明治年間に帰化し、関東地方以西の地などに発生する。

とある。明治年間にどなたが発見していたのか。専門家の御高教を待つ。

（平成 13 年 9 月 24 日）

※ 〒564-0012 吹田市南正雀 2-33-14

◆ 兵庫県植物誌研究会会報 No. 55 より転載

2003. 5. 31

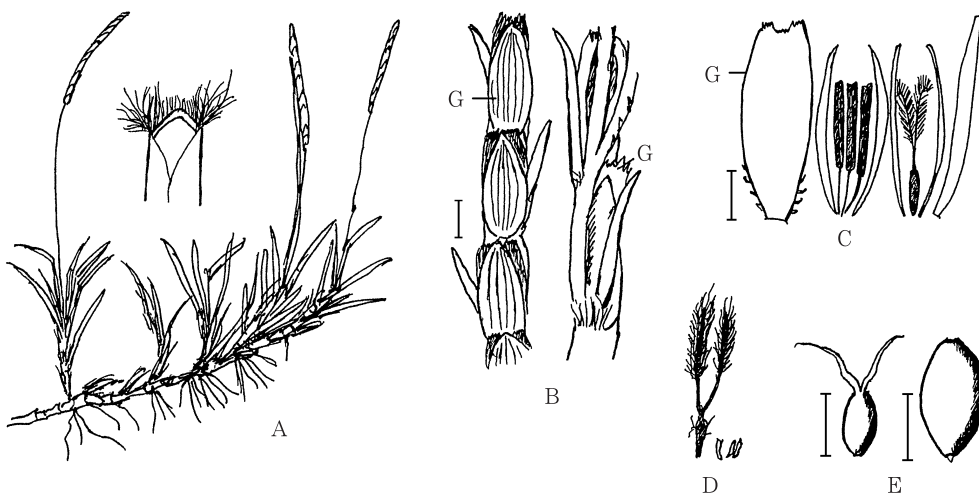
● ヒメウシノシッペイ（イネ科）を
 チャボウシノシッペイに訂正する

ヒメウシノシッペイは 2 回ほど会報に報告したが、この度「日本帰化植物友の会通信」にチャボウシノシッペイ *Eremochloa ophiuroides* Hack. とでている。従ってチャボウシノシッペイと訂正する。イネ科の多年草でちょっとこぶりだが、芝生の中などにこれから殖えてきそうな

植物である。根茎は丈夫ではう。花序を伸ばすと 15 cm 程になる。葉鞘の付け根はわら色、葉の幅は 5 mm には達しない。花序は 1 個の総だけからなる。総は 3~4 cm, 20 ほどの花をつける。外穎は 4 mm, 雄しべ 3, 雌しべは柱頭が 2 に分かれている。図に示したように背側から幅広い苞穎、薄い膜状の穎に包まれた 3 個の雄しべ、次に薄い膜状の穎に包まれた雌しべ、一番腹側に細い苞穎

がある。果実は 2 mm, 赤褐色。（図に使用した材料）宝塚市西谷 Aug. 30 1998 MY29351 A: 全体図 上図は葉舌附近 B: 穂の一部、左側が背側、右側が腹側 C: 花の模式図、左から苞穎、雄しべ、雌しべ、苞穎の順 D: 雌しべ、右側は鱗皮 E: 果実、左側は若い果実 G: 苞穎。

（矢内正弘）



特報

会員だけに限定して「中国(中華人民共和国)雑草原色図鑑」本体価格 22,000 円 + 消費税を、消費税・送料込みで 12,000 円でお送りしていますが、残部がわずかあります。ご希望の方はお申込み下さい。

なお、この特別価格は書店を通じての注文は適用されませんので、必ず全国農村教育協会に会員番号記入の上、FAX または郵送で直接お申し込み下さい。なお、本書は限定版ですので売り切れの節はご容赦下さい。

● 阪神帰化植物情報 (17) ※

現在も継続調査している、神戸港以外の阪神間で記録した帰化植物について報告する。報告する種類は、概ね帰化度1~3に該当する種類とした。

1 ヒメムツオレガヤツリ (2002. 8. 12 伊丹市中村)

植村修二氏からの情報によるもので、市内の猪名川河川敷に作られたピオトープ園の水辺で昨年、3株程度生育していた。キングヤツリと比較してみると、花序が小型で、小穂の基部が褐色となること等である。同時にオオカナダモ、チクゴスズメノヒエなども生育していた。

2 キングヤツリ (2002. 8. 12 伊丹市中村, 2002. 9. 14 宝塚市鳥ヶ脇)

上記伊丹市のものは、ヒメムツオレガヤツリと同じ場所で3株が生育していたもの。宝塚市のものは、新設された道路法面で1株が生育していた。河川改修に伴い、道路法面保護に用いられる輸入牧草種子の夾雑種子によるもので、今後とも注意して記録する必要がある。

3 コゴメイ (2002. 8. 12 伊丹市中村)

上記のヒメムツオレガヤツリと同じ場所で多数が生育していた。神奈川県植物誌 (2001) p. 246 で学名不詳種として記載されているものである。私は、同属のホソイと混同していたもので、ハーバリუმの標本を再度点検の必要があらう。状況からして、他所でも記録されると考えられる。

4 マツヨウセンノウ (2002. 10. 20 宝塚市下佐曾利)

道路に面した畑の縁で一株生育していた。観察の結果、雄花をつける株であった。畑に投与された堆肥類の随伴種と考えられる。

5 キヌゲチチコグサ (2003. 5. 3 伊丹市中村)

猪名川河川敷で多数が生育していた。私は、阪神間では神戸、西宮、宝塚で記録しているものである。伊丹市では今回の記録が最初である。生育場所は特殊な場所ではなく、新設の公園や道路脇の植え込み、緑地などで記録されるのと思われる。県下他所の情報をお願いしたい。

6 ビロードアカツメクサ (2003. 5. 3 伊丹市中村)

新設の公園で10株程度生育していた。私は、神戸市の六甲アイランドで採集しているが、今回が2回目である。稀な種類と思われる。同時にセイタカハハコグサも多数生育していた。サツキ植え込み時に投与された土壌改良材の随伴種と考えられる。

7 セイヨウオオバコ (2003. 5. 5 宝塚市鳥ヶ脇)

新設の道路法面で1株が生育していた。在来のオオバコと比べ、葉が厚く表面に短毛がある。別の場所に生育していたオオバコと比較してみる事ができた。一昨年から当該場所は機会ある毎に観察し、クジラグサ、ワルタバコ、ハタザオガラシ等を記録しているが、殆ど種類が一時帰化で終わっている。 (伊丹市 水田光雄)

※兵庫県植物誌研究会会報 No. 55 より転載

● 全農教 日本帰化植物友の会事務局よりのお知らせとお願い

● 事務局に寄贈戴いた情報誌

◆新潟県出雲崎町の酒井昭治様からご自身の著書である「新潟県の海辺の植物」B5判、278頁のカラーの立派な本を戴きました。また同時に「新潟県生物教育研究会誌」第16号~25号までを戴きました。

◆宮崎県清武町の荒木徳蔵様から「宮崎県の帰化植物新目録(3)」を戴きました。

◆兵庫県伊丹市の水田光雄様から「兵庫の植物13号」「兵庫県植物誌研究会会報 No.55」を戴きました。

◆その他多数の会員から、帰化植物に関する情報、写真などをお送り戴きました。個々の方々にはお礼の手紙は出しておりませんが、この友の会通信の紙面で厚くお礼申し上げます。お寄せ戴いた情報や写真で広く広報した方がよいと思われるものは順次この通信に掲載する予定でありますので、今後もいろいろな情報や写真をお送り下さいますよう、お願い申し上げます。多数の投稿をお待ちしております。

● 新しい帰化植物の写真をお持ちの方はお知らせ下さい

全農教では「帰化植物写真図鑑」の追補版の準備を進めております。会員の方で「帰化植物写真図鑑」に掲載してない帰化植物の写真をお持ちの方はご一報下さいますようお願い申し上げます。

● 友の会会員の特典について

日本帰化植物友の会の会員の方には、全国農村教育協会発行の図書については、本体価格の1割引でお送りいたします。全国農村教育協会の図書でご希望のものがございましたら、FAXまたは郵送で注文して下さい。この場合必ず会員番号を記入して下さい。(会員番号は宛名シールの下に記入してあります。)

※なお、この特典は書店を通じての注文には適用されませんので、必ず直接申し込んで下さい。(送料はかかりません。代金は請求書、振替用紙を同封しますから、現品到着後にお支払い下さい。)

全農教発行の図書を知りたい方はFAX、メール、葉書などでご請求いただければ図書目録をお送りします。また、全農教のホームページでもご覧いただけます。なお、昨年より愛読者の方々に「全農教出版ニュース」をお届けしていますが、友の会々員の方でそちらもご覧になりたい方がいらっしゃいましたら、ご連絡下さい。

全農教・日本帰化植物友の会事務局

〒110-0016 東京都台東区台東 1-26-6

(植調会館) 全国農村教育協会内

TEL 03-3833-1821 FAX 03-3833-1665

<http://www.zennokyo.co.jp>

e-mail:kika@zennokyo.co.jp